

対象の見方や感じ方を広げる中学校美術科学習指導の工夫 — 鑑賞のための制作により造形要素を意識する学習活動を通して —

廿日市市立廿日市中学校 中本 賢一

研究の要約

本研究は、中学校美術科の鑑賞領域における、対象の見方や感じ方を広げる指導の工夫について研究したものである。文献研究を通して、鑑賞における対象の見方や感じ方を広げるとは、鑑賞の視点を増やすことであると定義した。対象の見方や感じ方を広げるためには、鑑賞のための制作により、作品を構成し表現の工夫に使われている造形要素を鑑賞の視点として意識する学習が有効であると考えた。授業では、フィンセント・ファン・ゴッホの「星月夜」の鑑賞をする過程で鑑賞のための制作を行い、作品中の造形要素を意識する学習を行った。その結果、生徒は造形要素を意識して作品を鑑賞できるようになり、対象の見方や感じ方を広げることができた。このことから、鑑賞の授業において、鑑賞のための制作をする学習は、対象の見方や感じ方を広げることに有効であることが明らかになった。

キーワード：対象の見方や感じ方 鑑賞のための制作

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年）美術の第1学年の内容「B鑑賞（1）」の指導事項アに「造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。」¹⁾と示されている。

国立教育政策研究所における特定の課題に関する調査（图画工作・美術）（平成21年）によると、「形や色などの柔らかさや温かさ」「構図」「光や影」「表現の工夫」を意識する生徒の割合は、鑑賞時が5から6割、制作時が7から8割であり、制作時の方が高いことが判明した。同研究所は、これらの造形要素を鑑賞時に意識させる指導の工夫が大切であると提案している。広島県立教育センターにおける平成19年度後期の教員長期研修の研究では、鑑賞ノートに感じ取ったことをまとめ、その考えを基に相互批評を行えば、よさや美しさを幅広く味わえることを明らかにしている。一方で、相互批評後も見方や感じ方に変化のない生徒がいることを課題としてあげている。この課題の原因は、鑑賞時に形、色、材料、光などの造形要素を意識させる指導が不十分なためであると考えられる。

そこで、課題を解決するために、作品中の造形要素を意識させる制作活動（鑑賞のための制作）を実

施する。そうすることで、表現するときにも、鑑賞するときにも、造形要素が重要な要素であることを意識でき、よさや美しさなどに気付いて対象の見方や感じ方を広げられるようになると想え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 対象の見方や感じ方を広げることについて

(1) 美術科における対象の見方や感じ方について

福田隆眞（1991）は「作品の見方としては、直観的な方法によって作者の表現意図やイメージなどを理解する場合と、分析的な方法によって知的的理解をする場合が考えられる。」²⁾と述べている。図1は福田（1991）による「鑑賞の構造」の図である。

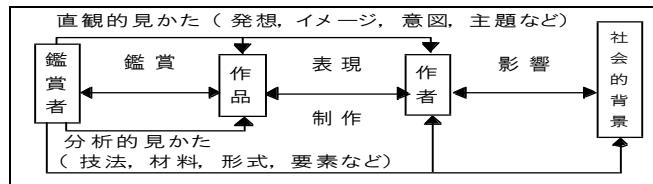


図1 鑑賞の構造

のことから、美術科における対象の見方や感じ方とは、直観的な見方や、分析的な見方を使い見たり感じたりすることといえる。

(2) 対象の見方や感じ方を広げるととは

中学校学習指導要領解説美術編（平成20年、以下「解説」とする。）に、「『作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げる』とは、鑑賞の学習において、生徒が自分が気付いたことや考えたことなどを互いに言葉で説明し合う活動を通して、自分にはない新たな見方や感じ方に気付き、見方や感じ方を広げることである。」³⁾と述べられている。つまり新たな見方や感じ方に気付けば、見方や感じ方が広がるということである。

福田隆眞（2010）は直観的な見方と、分析的な見方をするための鑑賞の視点を五つ挙げている¹⁾。五つの視点を福田（2010）の記述を基に表1に示した。

表1 鑑賞の視点

直観的な見方	主題や発想の視点	作者の制作意図や表現主題、発想を理解するには、分析的、知的方法によるものもあるが、直観的に把握することが必要である。
分析的な見方	技術、技法の視点	鑑賞学習で最も具体的な視点である。技術、技法の理解と習得によって表現の工夫を理解しながら鑑賞を進めることができる。
	造形要素の視点	点、線、面、色彩などの造形要素や、リズム、プロポーション、ハーモニーといった視覚言語からの鑑賞はデザインや構成の学習だけでなく、造形原理としてすべての領域に共通するものである。
	美術史的視点	絵画、彫刻、建築などの各領域にわたって系統的に配列しやすい方法である。時代配列で各々の分野の相互の関係を把握することができる。
	用途や機能の視点	おもにデザインされた作品についての鑑賞で、使用目的、人間工学などの機能からの視点を設定して、工作や工芸品などの鑑賞を行う。

熊野佳恵（2005）らは「鑑賞教育における知的理解の試み」²⁾において、直観的な見方は、鑑賞者の感性を高めたり発想力を育成したりする面で優れ、分析的な見方は、論理的な見方をすることで深い理解につながる面で優れていると述べ、両方の見方の必要性を説明している。作品を初めて見るときは、直観的に「この作品の主題は何か」という視点で見るが、分析的に見る視点も必要であることが分かる。

松村一樹（2009）は「対話を取り入れた相互教授による鑑賞授業」⁴⁾という題材の鑑賞の目標を、「相互教授や指導者からの外部情報により、新しい作品解釈や多層的な鑑賞ができる。」⁵⁾と設定し、実践例を紹介している。作品はレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」を使っている。授業内容は作品画面を分割し、各部の比較鑑賞をする中で意見交流をはかり、見方や感じ方を広げようとするものである。目標を達成した生徒は感想文に「はじめは気付かなかつたけれど、背景の雰囲気が位置によってぜんぜん違っていて不思議な絵だと思った。表情も笑って

いるけど、すこし寂しそうにも見えた。」⁶⁾と記述している。この記述から背景の描き方の差の発見（技術、技法の視点からの見方）や、表情への新しい解釈（主題や発想の視点からの見方）が生じていることが分かる。新たな鑑賞の視点をもつと、見方や感じ方が広がるのである。

以上のことから、対象の見方や感じ方を広げるとは、自分のもつ鑑賞の視点を増やすこととする。

2 鑑賞のための制作により造形要素を意識する学習活動について

(1) 造形要素を意識する学習活動について

福田（2010）は、造形要素について「造形表現のための要素として、形、色、材質感（テクスチュア）の3つがあり、それらは造形要素と呼ばれている。この造形要素にはそれぞれに属性をもっており、形においては点、線、面、立体（空間）があり、色には明度、彩度、色相の三属性がある。また、材質感には、粗い、滑らか、柔らかい、堅い、などの言語に置き換えられるものだけではなく、視覚的な特性として認識されるものがある。」⁷⁾と述べている。

広島県立教育センターにおける平成22年度後期の教員長期研修の研究では、福田（2010）の知見を基に鑑賞授業で取り扱う造形要素についての定義を次のように行っている。「造形的な要素は、形、色彩、材質感（テクスチュア）の三つととらえ、それぞれに属性を持つものとする。具体的には、形の属性は点・線・面、色彩の属性は色相、明度、材質感（テクスチュア）の属性は視覚・触覚などである。」⁸⁾と定義し、表2のようにまとめている。本研究も美術科の鑑賞授業において造形要素を扱うため、先行研究が提示したものを使うこととする。なお、福田（2010）の示した造形要素と、先行研究で示されている「造形的な要素」は同義であるため、以下造形要素として表記する。

表2 造形的な要素と属性

造形的な要素	形	色彩	材質感
属性	点・線・面	色相・明度・彩度	視覚・触覚

「解説」では、作者の心情や意図と表現の工夫に関する記述において「心情や意図と表現の工夫などは、必ずしも正解があるものではないので、作品が表している内容や、形、色彩、材料、表現方法等から自分として根拠をもって、読み取ることが大切である。」⁹⁾と述べられている。主題設定の理由でも

述べたが、国立教育政策研究所の報告によると、生徒が造形要素を意識する割合は、鑑賞時と制作時では鑑賞時の方が低いことが指摘されている。

以上のことから、本研究では生徒に増やす鑑賞の視点を「造形要素の視点」に焦点化する。

(2) 鑑賞のための制作とは

表現の題材では、先に作品鑑賞をして造形要素が表現の工夫にどう生かされているか意識させ、生徒の表現の幅を広げて制作する展開は数多くある。しかし鑑賞の題材では、鑑賞に関する授業研究が依然として不十分なため、作品理解のため制作をする展開はあまり見られない。福本謹一（2010）は「これまで表現と鑑賞とは表裏一体のものととらえられてきた。表現活動をする中で、作品を鑑賞し合い、友達の作品の『よさを感じ取る』ことは鑑賞の起点でもあった。一方で、芸術作品を表現の参考作品として提示し、表現形式の多様性や技法の紹介をして表現に向かうこともある。表現から鑑賞へあるいは鑑賞から表現へという単線的な方向ではなく、表現→鑑賞→表現、鑑賞→表現→鑑賞など様々な方向性が考えられる。」¹⁰⁾と鑑賞活動の中に表現（制作活動）を取り入れた指導もあるのではないかと示唆している。

前田康裕（2005）は「雪舟と水墨画」（小学校第5・6学年の图画工作の題材）で、雪舟の水墨画鑑賞を効果的に行うために制作することを提案している。前田は授業のねらいを「雪舟の作品のよさは、見ただけではなかなか分かりません。そこで墨汁と画用紙を使って、実際に水墨画を描いてみると、雪舟の良さを味わうことをねらいとしています。」¹¹⁾としている。「雪舟と水墨画」は実践報告であり有効性についての検証はなされてないが、墨の性質（造形要素の中の材質感）や、筆使い（表現の工夫）については、描かないと実感できないことがあるところに注目したい。私は、表現のための鑑賞が、生徒自身の表現の幅を広げるための鑑賞であるのと同様、その逆である鑑賞のための表現（制作）も見方や感じ方を広げるために有効であろうと考えた。

このような、対象を鑑賞する際に造形要素や表現の工夫などに気付くための活動を「鑑賞のための制作」とする。

(3) 鑑賞のための制作により造形要素を意識する学習活動の具体的な内容

福本（2010）が示唆する、鑑賞→表現→鑑賞の流れの具体化を次に挙げる。自分の見方や感じ方で対象を鑑賞する（鑑賞①）。気付きには個人差があり、

鑑賞の視点をもてない生徒の存在が予想される。このような生徒への手立てとして、先行研究では個人鑑賞後、他との意見交流で鑑賞の視点を増やすことに成功している。しかし十分に鑑賞の視点が増えない生徒もいることが課題として残されている。

そこで、鑑賞のための制作（鑑賞作品中の造形要素を意識できる課題）活動を行う。輪郭線を例に説明する。線は幅やタッチを変えると、鑑賞者に与える印象が変化する。生徒に、人物を太い線、細い線で描かせ、受ける印象の違いを考えさせる。一人一人の描き方は微妙に違うが、「太い線の方が力強い感じがする。目立つ。」などの感想をもつであろう。線の太い細いによって受ける印象の違いを実感するのである。制作後、人物の輪郭線が太い作品を鑑賞すれば、「この人物の輪郭線は太いから、人物が目立つ。力強い感じが伝わってくる。」という、造形要素とイメージを結び付けた新しい見方や感じ方をもてると考えられる。

最後に鑑賞①で見た作品を、再鑑賞する（鑑賞②）。鑑賞①と鑑賞のための制作を経て、新たな気付きがあり、鑑賞①直後より見方や感じ方が広がった生徒の増加が期待できる。図2は鑑賞のための制作の指導過程を示したものである。

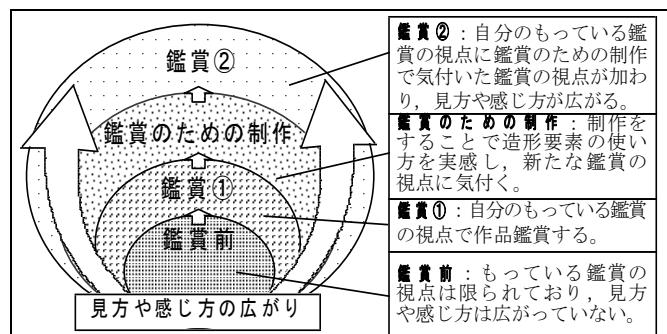


図2 鑑賞のための制作を取り入れた指導過程

III 実態調査について

1 実態調査の内容と方法

「対象の見方や感じ方」について、生徒の実態を把握し、授業実践及び検証に生かすために、事前・事後の実態調査を行った。

- (1) 実施日 事前 平成24年12月7日
事後 平成24年12月17日, 18日
- (2) 調査対象 所属校第1学年 (2学級69人)
(当日回答, 事前66人, 事後66人)
- (3) 調査方法
事前事後の実態調査の内容と方法を表3に示す。

表3 事前事後の実態調査の内容と方法

	内 容	方 法
事 前	・自分の見方や感じ方についてどう思うか	4段階評定尺度法
	・対象を鑑賞する時の着眼点	自由記述
事 後	・自分の見方や感じ方についてどう思うか	4段階評定尺度法
	・鑑賞のための制作は見方や感じ方を広げるのに役立ったか	4段階評定尺度法
	・対象を鑑賞する時の着眼点	自由記述

2 調査結果の分析と考察

図3は、鑑賞する際に、生徒がどの程度自分なりの対象の見方や感じ方をもっていると実感できているかについてのアンケート結果（事前）を、グラフにしたものである。

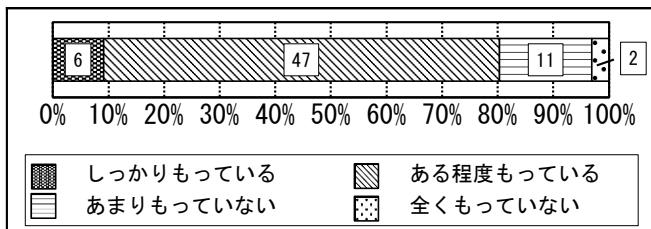


図3 自分の見方や感じ方をどの程度もっているか(人)

「しっかりもっている」が9.1%（6人）、「ある程度もっている」が71.2%（47人）で80.3%（53人）の生徒が対象の見方や感じ方をもっていると実感していることが分かった。

実感する理由を見ると、作品を見て楽しいなどの感情がわくことを理由に挙げている生徒が多いが、具体的に形、色、材質感などの造形要素の視点から鑑賞していると答えている生徒は10人である。作品を理解しようとしているから、表現の意図を考えているなどの理由を挙げている生徒もいるが、どの程度造形要素を意識しているか明確ではない。見方や感じ方をもっていないという生徒は、鑑賞する際に視点がもてないことと、経験不足を挙げている生徒が多い。

表4は生徒が作品を鑑賞する時に着目しているところについてのアンケート結果を示したものである。

表4 生徒が鑑賞するときに着目しているところ

造形要素	その他
形(44人)	デザイン(16人), 描き方について(12人), 細かいところ(9人), 何を伝えたいのか(4人)
色彩(51人)	
材質感(11人)	

造形要素に関するこことについては、色彩（51人）、形（44人）、材質感（11人）である。色彩や形について着目している生徒に比べ、材質感について着目している生徒は少ない。したがって、鑑賞のための

制作の活動を通して、色彩や形だけではなく、材質感についても着目させていく工夫が必要であると考える。

IV 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

鑑賞授業において、鑑賞のための制作を行えば、生徒は造形要素を意識することができ、対象の見方や感じ方を広げることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表5に示す。

表5 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
○対象の見方や感じ方を広げることができたか。 ・造形要素を意識した鑑賞の視点を増やすことができたか。	事前アンケート 事後アンケート プレテスト ポストテスト
○鑑賞のための制作が有効であったか。 ・鑑賞のための制作が、造形要素を意識した鑑賞につながり、対象の見方や感じ方を広げるのに有効な活動であったか。	事後アンケート ワークシート

V 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成24年12月10日～18日
- 対 象 所属校第1学年（2学級69人）
- 題材名 「描いて見付けよう！ゴッホの作品のよさや美しさ」
- 目 標

鑑賞のための制作を通して形、色彩、材料などの造形要素を意識して鑑賞し対象の見方や感じ方を広げることができる。（鑑賞の能力）

2 指導と評価の計画

	学習内容(時数)	評価規準	評価の方法
第1次	○美術作品を造形要素を意識して鑑賞する。(1時間)	鑑：自分なりの見方や感じ方で造形要素に注目して鑑賞をしている。	生徒の発言 ワークシート
第2次	○鑑賞のための制作を通して造形要素の使い方を実感する。(1時間)	鑑：鑑賞のための制作により造形要素がどのように表現の工夫に使われているか気付いている。	生徒の発言 ワークシート
第3次	○学習の成果を活用し、造形要素の視点から鑑賞を行う。(1時間)	鑑：鑑賞のための制作で気付いた造形要素の使われ方（表現の工夫）を鑑賞の視点として活用し、見方や感じ方を広げている。	生徒の発言 ワークシート

3 鑑賞のための制作により造形要素を意識する学習活動の実際

(1) 鑑賞のための制作により造形要素を意識する学習活動の流れ

- ① 鑑賞①で、これまで身に付けてきた見方や感じ方でどこまで鑑賞できるか確認する。
- ② 鑑賞のための制作をして、造形要素や表現の工夫に気付く。
- ③ 自分の見方や感じ方と比べて②で新しく気付いたことを併せて鑑賞し見方や感じ方を広げる。

(2) 鑑賞する作品

図4は、フィンセント・ファン・ゴッホの「星月夜」である。



図4 フィンセント・ファン・ゴッホ「星月夜」

この作品に含まれる造形要素とその使い方を、表6にまとめた。今回の研究授業では、鑑賞のための制作をすることで、形、色彩、材質感に着目させ、造形要素を意識した鑑賞につながるようにする。

表6 「星月夜」に含まれる造形要素とその使い方

造形要素	使い方
形	① 手前の糸杉と中央にある教会の大きさを変えて遠近感や奥行きのある表現
	② 雲や星に使われているタッチから大気の動きや星の輝きを感じさせる表現
色彩	③ 印象派の特徴である点描（並置混色）により彩度が落ちない混色の効果
	④ 空に使われた青と月や星の黄色による補色対比の効果
材質感	⑤ 写真でも油絵の具の厚みが見とれる表現
	⑥ 糸杉に塗られた絵の具から量感が感じ取れる表現

表6に示した造形要素に気付かせるために、授業では第2次にワークシートを3枚使用し、実際に絵の具などを使用した制作を行った。図5はワークシート1, 2, 3である。

鑑賞のための制作 ワークシート1

1年 組 番

制作(1)

①夜空の月を描いてみよう。
真ん中の二日月が、夜空に浮かんでいるように色をつけてみましょう。（ゴッホの描き方はまねせずに、自分なり考えて…。）

制作(1)

②ゴッホ描いた夜空の月を描いてみよう。
真ん中の二日月が、夜空に浮かんでいるように、ゴッホが使った色と書き方を経過して描いてみよう。

(1) ①を描き終えて。
自分の描いた月夜はどんな感じしますか？

(2) ②を描き終えて。
ゴッホが描いた夜空の月はどんな感じしますか？

鑑賞のための制作 ワークシート2

1年 組 番

制作(2)

①糸杉（名前）と教公の建物を比べてみよう。
・実際は、糸杉の大きさ（高さ）と教公の大きさ（高さ）は同じ大きさ（高さ）であるとします。
下の図に糸杉と教公を自分から同じ距離に見えていると考えて、描いてみよう。（左に糸杉、右に教公）

制作(2)

②糸杉（名前）と教公の建物を比べてみよう。
・実際は、糸杉の大きさ（高さ）と教公の大きさ（高さ）は同じ大きさ（高さ）であるとします。
下の図に糸杉は自分自身のすぐ近く（画面の左側）、教公はすっと遠く（画面の右側）に見えるように描いてみよう。

石の塔と左の塔を比べてみましょう。画面の中で、空間の広がりを感じるのはどちらでしょう。
(左に石の塔、右に左の塔)

なぜ空間の広がりを感じるのでしょうか？

右の塔と左の塔を比べてみましょう。画面の中で、空間の広がりを感じるのはどちらでしょう。
(右に右の塔、左に左の塔)

なぜ空間の広がりを感じるのでしょうか？

鑑賞のための制作 ワークシート3

1年 組 番

制作(3)

①糸杉を描いてみよう
(まずは糸の貝を水で薄めて、Pさしく描いてみよう)

描かれた画面に見える糸の跡をタッチといいます。タッチは作品を見る人に様々な思いを起こさせます。

ゴッホの描いた「星・月・夜」のタッチは皆さんにどのような思いを起こさせたのでしょうか？

制作(3)

②ゴッホの描き方に糸杉を描いてみよう。
(DVDの映像を見て、ゴッホの手元を見ながら描き方をさわってみよう。)

描かれた糸の表面のこととマチエールといいます。マチエールも作る見る人に様々な想いを起こします。

ゴッホの描いた「星・月・夜」のマチエールは皆さんにどのような思いを起こさせたのでしょうか？

(3) ①の制作をしてみて、この線からどのような感じを受けますか？

線の表面はどのようになっていますか？

なぜ感じるのでしょうか？

制作(3) ②ゴッホ描いた糸はどんな感じがしますか？

なぜ感じるのでしょうか？

図5 ワークシート1（上）, 2（中）, 3（下）

ワークシート1のねらいは、表6の使い方②, ③, ④に気付かせることである。ワークシート2のねらいは、表6の使い方①に気付かせることである。ワークシート3のねらいは、表6の使い方⑤, ⑥に気付かせることである。いずれのワークシートでも、描き方を変えることで、描かれた2つの作品を比較し、生徒がゴッホ作品のよさを発見できるよう工夫した。

VI 研究授業の分析・考察

1 対象の見方や感じ方を広げることができたか

本研究授業で、造形要素を意識した鑑賞の視点を増やすことができたかどうかを事前アンケート、事後アンケート、プレテスト、ポストテストから検証する。

(1) 対象の見方や感じ方が広がったことを実感できたか

図6は、生徒が作品などを鑑賞するときの見方や感じ方についてどう思うか、アンケートを基に授業前後の変化をグラフに表したものである。

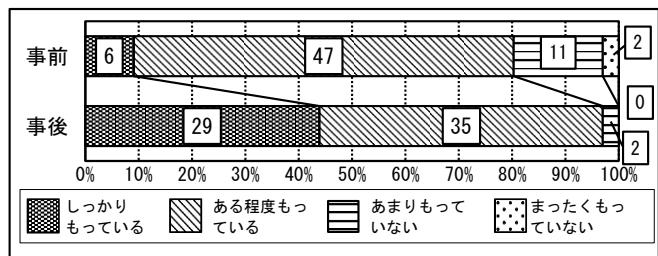


図6 自分の見方や感じ方をどの程度もっているか（人）

授業前と授業後を比べると、自分は見方や感じ方をもっていると肯定的にとらえている回答（「しっかりともっている」と「ある程度もっている」を合わせたもの）が80.3%から96.9%に増加した。見方や感じ方をもてていないと否定的にとらえている回答（「あまりもっていない」と「全くもっていない」を合わせたもの）が19.7%から3%に減少した。「全くもっていない」と回答した生徒は一人もいなくなり、授業後では3%の生徒は十分に視点をもつことができなかつたが、大半の生徒が肯定的な回答であった。

以上のことから、生徒は鑑賞のための制作の授業を通して、自分の見方や感じ方は広がったと意識していることが分かる。

(2) 鑑賞の視点は増えたか

図7は、生徒が事前・事後のアンケートで答えた鑑賞の視点の数の変化をグラフに表したものである。

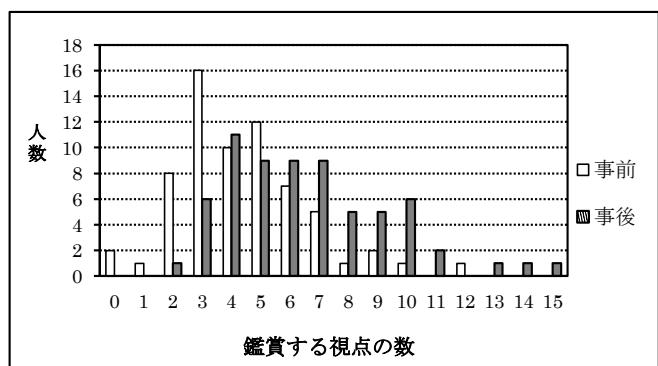


図7 鑑賞する視点の数の変化（人）

授業前には、鑑賞する視点は12個が最大数であったが、授業後には15個の視点を挙げている生徒がいる。平均値は事前が4.2個であったが、事後は6.3個まで増えている。授業前に全く視点の書けない生徒がいたが、授業後は2個が最小数となり全体的に生徒の中に鑑賞する視点が増えたことが分かる。

(3) 造形要素を鑑賞の視点とした記述ができるようになったか

図8はプレテスト、ポストテストで使用したフィンセント・ファン・ゴッホの「夜のカフェテラス」である。

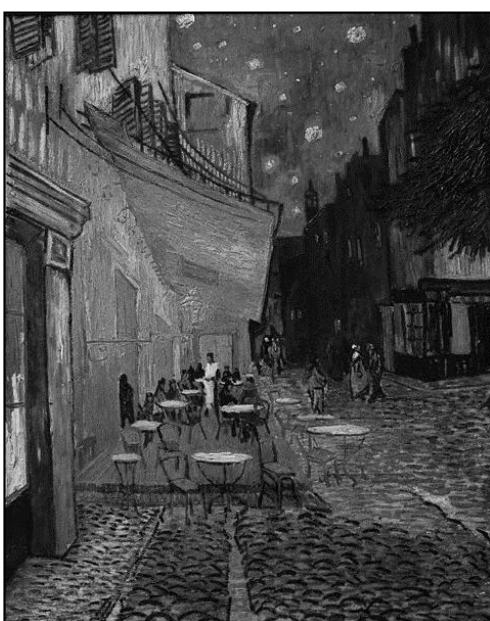


図8 フィンセント・ファン・ゴッホ「夜のカフェテラス」

授業で使用した作品と同じ作者の作品である。形については、近景と遠景で物の大きさが変わる遠近法が使われている。色彩は、配色が夜空の青とカフェの明かりの黄が補色対比として使われている。材質感は、使われている画材が油絵の具であること、星、樹木、道の表現にはかなり厚く絵の具が塗られており、絵の具の質感や量感を感じ取りやすいことなど、共通点のある作品である。

プレテスト、ポストテストは授業前、授業後に実施し、生徒に作品から感じたことや思ったことを記入させ、鑑賞のための制作により造形要素を意識して鑑賞することができたか検証を行った。

次ページの図9はプレテスト、ポストテストにおいて、造形要素を意識して鑑賞していると判断される記述の数の変化をグラフで示したものである。なお、造形要素の視点で一つ以上記述できた生徒をおおむね満足できると判断した。

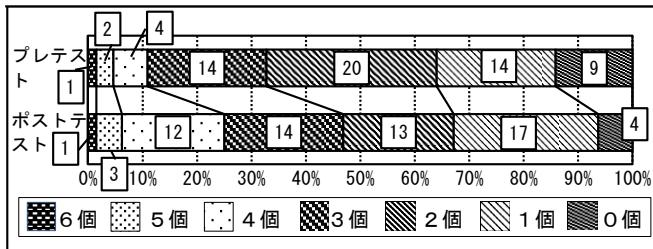


図9 造形要素を意識して鑑賞した記述の数(人)

次の文は造形要素を意識して鑑賞できるようになった生徒Aの記述である。

(プレテスト) 立体的になっている。電球が光って周りの所も光ってきれいに見えること。空が高く見える。
 (ポストテスト) 家が重ね塗りされているので、立体感が出ている。家の大きさによって距離感が出ている。地面が重ねて塗られているので、でこぼこに見える。明るい色の周りに似た色を描いているのできれいに見える。

生徒Aの記述

立体的に見える理由を重ね塗りであったり、形を変えて描いたりすることで距離感が出るなど、学習した見方や感じ方を活用して鑑賞していることが分かる。

この結果を有意水準1%片側検定でt検定したところ、事前と事後に有意な差があることが明らかになった。

以上、事前アンケート、事後アンケート、プレテスト、ポストテストの結果から、生徒は鑑賞のための制作により造形要素を意識した鑑賞を行い、対象の見方や感じ方を広げることができたといえる。

2 鑑賞のための制作により造形要素を意識させる学習活動が有効であったか

(1) 鑑賞のための制作が対象の見方や感じ方を広げるのに有効であると実感できたか

図10は鑑賞のための制作が作品などの見方や感じ方を広げるのに役立ったかという事後アンケートの結果をグラフで表したものである。

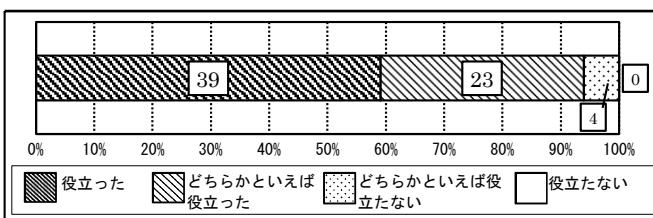


図10 鑑賞のための制作は見方や感じ方を広げるのに役立ったか(人)

「役立った」「どちらかといえば役立った」と肯

定的な回答をした生徒が93.9%（62人）で、「どちらかといえば役立たない」と否定的な回答をした生徒は6.1%（4人）で「役立たなかった」と答えた生徒はいなかった。

また、生徒は、有効である理由を次のように答えている。

- ・(生徒B) ゴッホに似た塗り方と自分の塗り方を比べ違いを発見して、それを見方に使えるようになったから。
- ・(生徒C) 自分で実際に塗ってみたら、「確かにそうだ。」とか「これをすると盛り上がって見えるな。」と自分で気付けたから、役に立った。
- ・(生徒D) 私は今まで作品の色の組合せは見ていましたけど、画家によって描き方の違いがあることが分かったから。

生徒(B, C, D)の考える鑑賞のための制作が対象の見方を広げるのに役立つという理由

いずれの生徒も、鑑賞のための制作から表現の工夫を造形要素の視点で見取れたと実感したことが分かる。表7は、授業後の感想をまとめたものである。

表7 鑑賞のための制作授業後の生徒感想

記述内容	人数
学習したことを生かして、造形要素や表現の工夫に着目した鑑賞をしていきたい。	13
自分の見方や感じ方の広がりを実感した。	28
学習したことを自分の表現に使えそう。	13
学習したことを鑑賞の時にも、表現の時にも使うことができそう。	6
その他	5

多くの生徒が、鑑賞のための制作で見方や感じ方が広がった、造形要素を意識するようになったと記述しており、学習成果を次の鑑賞でも使えると考えている。中には自分の表現にも生かそうと考えた生徒もいた。

のことから、生徒は、鑑賞のための制作が対象の見方や感じ方を広げるのに有効だと実感しているといえる。

(2) 鑑賞のための制作により造形要素を意識した鑑賞ができたか

授業を受けた65人の生徒のうち、ワークシートに造形要素を意識し記述した生徒は60人であった。以下は、造形要素に対する意識が高まったと思われる生徒E, Fの記述である。

- ・(生徒E) 薄く描いてみるのもいいけれど、大きく大胆に描いてみるのもすごくきれいに見えます。色を重ねることで新しい発見をすることができて良かったです。
- ・(生徒F) 並置混色を使って周りを明るくしたり、水で薄めずに色を盛り上げて描くと、力強い感じが出る。

生徒E, Fの記述

生徒Eは、自分好みの描き方ではなく、ゴッホの描き方を意識して描くことで、ゴッホの表現のよさを感じ取り、新しい見方や感じ方を発見することができている。生徒Fは、星や月の輝きを鮮やかに見せる並置混色の効果と、存在感や力強さを出すために厚く盛り上げた絵の具の効果を鑑賞のための制作から感じ取っている。このように鑑賞のための制作から多くの生徒が造形的な要素を意識した記述ができるようになっている。

以上のことから、生徒は鑑賞のための制作により造形要素を意識した鑑賞をすることができたといえる。

VII 研究のまとめ

1 研究の成果

- 対象の見方や感じ方を広げる指導の工夫として、鑑賞のための制作により造形要素を意識させる活動を取り入れることが有効であることが分かった。
- 生徒アンケートの記述に、鑑賞のための制作から学んだことを自分が作品制作（表現活動）に役立てたいという内容のものがあった。これは、この教材が、表現領域の題材においても導入できる可能性があることを示している。

2 今後の課題

- 事後アンケートにおいて、鑑賞のための制作をしても鑑賞の視点が増えなかった生徒、鑑賞のための制作が見方や感じ方を広げるのには役立たないと回答した生徒がいた。これらの生徒には、次の二つの手立てが必要であると考える。一つ目は、造形要素に関する知識の定着を図ることである。具体的にはワークシートの分析や定期テストなどで定着度を確認し、知識定着のための教材作りをすることが考えられる。二つ目は、造形要素がどのように表現に使われているか、さらなる鑑賞経験の中から理解し、鑑賞の視点として活用できるように指導を工夫していくことである。
- 今回は第1学年に対し、ゴッホの作品（絵画）を使用して指導を行った。鑑賞の対象は彫刻やデザインの作品も含めるととても多い。限られた時間で見方や感じ方を広げていくには、鑑賞作品の選択が重要になる。作品に含まれる造形要素に気付かせるために「鑑賞のための制作」で取り上げる内容と活動の方法を吟味し、他学年、他の鑑賞作品にも鑑賞のための制作を取り入れた実践を進

めていきたい。

【注】

- (1) 五つの視点についての詳細は、『新版 美術科教育の基礎知識』(1991) p. 140を参照されたい。なお、福田は五つの観点としているが、本稿では観点を視点と同義と考え、視点と読み替えている。
- (2) 熊野佳恵 林徳治 福田隆眞 山田晃子 (2005) : 山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第20号『鑑賞教育における知的理による試み』 p. 175に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成20年) : 『中学校学習指導要領』東山書房 p. 81
- 2) 福田隆眞 (1991) : 「鑑賞教育におけるいろいろな観点について述べよ」『新版 美術科教育の基礎知識』建帛社 p. 140
- 3) 文部科学省 (平成20年) : 『中学校学習指導要領解説 美術編』 p. 46
- 4) 松村一樹 (2009) : 「対話を取り入れた相互教授による鑑賞授業」『中学校新学習指導要領の展開美術編』明治図書 p. 165
- 5) 松村一樹 (2009) : 前掲書 p. 165
- 6) 松村一樹 (2009) : 前掲書 p. 165
- 7) 福田隆眞 (平成22年) : 「美術科における造形要素の果たす役割とは何ですか」『美術科教育の基礎知識』建帛社 p. 9
- 8) 前寄飛鳥 (平成22年) : 「日本の美術文化に対する理解と愛情を深める美術科学習指導の工夫 — 作品の造形的な要素に着目させる活動を通して — 」広島県立教育センター平成22年度後期教員長期研修発表会資料
- 9) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書 p. 45
- 10) 福本謹一 (平成22年) : 「鑑賞学習の目的や内容について教えてください」『美術教育の基礎知識』建帛社 p. 139
- 11) 前田康裕 (2005) : 「雪舟と水墨画」
<http://www.d-project.jp/2005/kyouzai/contents/maeda04/pdf/maea04.pdf>

【参考文献】

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (平成21年) : 『特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果（小学校・中学校）
- 野崎倫子 (平成19年) : 「作品のよさや美しさを幅広く味わわせる中学校美術科学習指導の工夫 — 互いに批評し合う活動を通して — 」広島県立教育センター平成19年度後期教員長期研修発表会資料
- 若元澄男編 (2000) : 『図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』明治図書
- 國府寺司 (2006) : 『西洋絵画の巨匠2 ゴッホ』小学館